

こども教育宝仙大学 研究室だより 第6回

「0・1・2歳児の仲間関係」

保育所等においては、家庭とは異なる、自分と年齢の近い他児に囲まれた生活があります。そこでは、子どもたち同士の豊かなかかわりあいの姿を見ることができます。

子どもたち同士の関係性は、生後まもない時期から始まることがわかっています。保育の場では、遊びの中で、子どもたち同士で共振しあい、からだの動きが同調することで、「楽しい」「面白い」という快の情動を共有します。このような体験の積み重ねが相手との親密性を育む1つの要因だと考えられます。

一方で、お互いの欲求や思いがぶつかり合い、いざこざになることも日常的に起こります。つまり、子どもたちは、快の情動共有によって相手との親密性を深める一方で、それがゆらぐような出来事を通して自分や相手の不快な情動にも出会うというアンビバレントな体験をしているといえます。それは、他者との関係性を深めていく上で重要な意味を持つと考えられます。

この年齢の子どもは、言葉で自分の気持ちを相手に伝えることも、相手の気持ちを理解することも、大人の助けなしにはできないため、それぞれの場面での保育者の適切な援助が不可欠となります。保育の中で、子ども同士が十分に関わり合い、他者の思いに触れることができるような環境づくりや、保育者の行う援助について、保育者の方々と一緒に考えていきたいと思っています。

(須永美紀 研究分野：乳児保育 (関係性、環境))

